様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００７２０

研究課題名（和文）典型的な構文指導リストの精緻化と行動志向の文法指導法に関する研究

研究課題名（英文）Action-Oriented Approach to L2 Grammar Instruction: Canonical Constructions Instruction Lists Refinement

研究代表者
能登原　祥之（Notohara, Yoshiyuki）

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：７０３００６１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、汎用英語母語話者話し言葉コーパスを利用し、10種の典型的な構文に現れる間接発話行為を教育的にも配慮された6種の言語機能（下位132種の発話行為を含む）で分類し記述していく研究である。発話内力表示表現を指標とし、より広く時制・相・モダリティの３つの視点から用例観察を行い、特に典型的な構文に現れる間接発話行為をより精緻に記述していった。調査の結果、典型的な構文の構文的意味と間接発話行為とに慣習的な換喩的拡張関係があることがわかり、その言語特徴を添える形で、典型的な構文指導リストを精緻化した。最後にそのリストをふまえ、典型的な構文と間接発話行為双方の視点から、新たな文法指導法を模索した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義は、(1)最新の汎用英語母語話者話し言葉コーパスの調査結果をふまえ、①典型的な構文、②構文内に見られる発話内力表示表現として時制・相・モダリティ表現、③構文外に現れる間接発話行為　の３種の言語特徴の関連性を統計的に確認した点にある。また、(2)特に調査対象となる構文内に見られる発話内力表示表現の種類を増やし、用例観察の幅を広げ多角的に用例を観察、３つの言語特徴の関連性の強さと方向性までを精緻に確認した研究手法にある。さらに、(3)行動志向の英語教育における文法指導内容と文法指導法を、典型的な構文と間接発話行為双方の視点から模索した点にある。

研究成果の概要（英文）：This study confirms association strengths between canonical schema constructions (CSCs), tense-aspect-modality (TAM) markers as illocutionary force indicating devices (IFIDs) and indirect speech acts (ISAs) within and out of CSCs through the SpokenBNC 2014 corpus. The results showed that ten canonical constructional meanings of CSCs with not only modality markers, but also tense, aspect, and semi-modality markers were metonymically related to frequently conventionalised ISAs emerged from CSCs in given contexts (e.g., the other two are bit thick (PRESENT STATES FOR EXPRESSING DISSATISFACTION)). Finally, based on the co-occurred relationships between three linguistic features (CSCs, TAM markers, and ISAs) in the interfaces between syntax-semantics-pragmatics of CSCs, action-oriented approach to L2 grammar contents and instruction are newly explored in terms of both CSCs and ISAs.

研究分野：英語教育学・コーパス言語学

キーワード：典型的な構文　時制・相・モダリティ　語用論標識　間接発話行為　話し言葉コーパス　教育文法

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は、行動志向（action-oriented）の英語教育における文法指導内容と効果的な指導法を、典型的な構文（スキーマの拡張性と頻度がともに高い構文）と文脈の視点から、言語データに基づき提案することを目的とした。近年、CEFR（欧州言語共通参照枠）(e.g., Council of Europe, 2001, 2020; Green, 2012; Piccardo & North, 2019)の影響から、日本の英語教育においても、行動志向の英語教育が推奨され、教育文法（pedagogical grammar）においても形式重視から機能重視の記述・説明のあり方が探究されている。特に、コーパス語用論研究（corpus pragmatics）(e.g., Adolphs, 2008; Aijmer & Rühlemann, 2015; Landert et al., 2023; Rühlemann, 2019）が進み、コーパスに基づきモダリティを中心とする高頻度の語彙文法的表現（lexico-grammatical expressions）が紹介され、教育文法書の発話行為（indirect speech acts: ISAs)の記述・説明も少しづつ豊かにはなってきている（e.g., Carter & McCarthy, 2006; Collins COBUILD, 2017）。しかしながら、記述は断片的で実際の文法指導で扱えるまで指導内容や指導法がしっかりと整理されているとは言いがたい。

そこで本研究では、典型的な構文と文脈との関係をより丁寧に観察し、教育内容をより精緻に整理していくため、認知語用論的視点から教育文法の指導内容や指導法を新たに探ることとした。特に、前回までの研究で整理した典型的な構文に見られる間接発話行為をより精緻に再検証し、汎用英語母語話者話し言葉コーパスを通して対象となる用例を新たに抽出し、あらためて観察・記述していくこととした。そして、今後の行動志向の英語教育における文法指導の指導内容と指導法を、典型的な構文と間接発話行為の双方向から提案していくことを目的とした。

２．研究の目的

上記の行動志向の英語教育、教育文法の動向、そして前回までの研究経緯をふまえ、(1) 最新の汎用英語母語話者話し言葉コーパスに基づき、① 典型的な構文、② 時制・相・モダリティ表現、③ 間接発話行為、の３つの言語特徴の呼応関係を多角的に観察し記述すること（典型的な構文に現れる間接発話行為の観察と記述）、(2) その言語観察・記述結果をもとに、典型的な構文に現れる間接発話行為を指導内容としてリスト化し精緻化すること（典型的な構文に現れる間接発話行為を指導内容として整理）、(3) そのリストをふまえ、行動志向の英語教育における文法指導法を提案すること（行動志向の文法指導法の提案）、の３点を目的とした。

３．研究の方法

(1) Sketch Engine 上の Spoken BNC 2014 (約 1,000 万語）を利用し、典型的な 13 構文の中でも比較的頻度の高い 10 構文の代表的な動詞の用例を、ランダムサンプリングで 1000 例抽出し、典型的な構文を目視で同定し頻度を確認する。(2) 1000 例の構文内に見られる 6 種の時制（現在・過去）・相（進行・完了）・モダリティ（モダリティ・セミモダリティ）表現を目視で同定し頻度を確認する。(3) 6 種の言語機能（タイプ１：事実報告・要求、タイプ２：態度表現・認知、タイプ３：説得、タイプ４：関係構築、タイプ５：談話構成、タイプ６：意思伝達修復）を目視で同定し、特に関連のある間接発話行為の頻度を確認する。(4) 6 種の時制・相・モダリティ表現を固定した場合の 10 種の構文と、頻度の高い間接発話行為との結び付きの強さと方向性を、RStudio (2009-2020) 1.3.1093 を用いてコロストラクション分析（Dunn, 2022; Gries, & Stefanowitsch, 2004; Schmidt, & Küchenhoff, 2013; Stefanowitsch, & Gries, 2003）を行う。(5) 指標とした ΔP スコアをふまえ、「典型的な構文の指導リスト」に各構文に現れる頻度の高い慣習的な間接発話行為（conventionalised ISAs）を添える形で精緻化する。(6) 新たに精緻化されたリストをふまえ、典型的な構文を重視した指導と、間接発話行為を重視した指導（解釈活動・明示的指導・機械的練習・タスク・協調的対話）とをそれぞれ提案する。

４．研究成果

(1) 物理世界スキーマ構文の場合

13 種の構文の中でも頻度の高い３種の典型的な構文、状態スキーマ（occurrence schema: states）構文、場所スキーマ（location schema）構文、所有スキーマ（possession schema）構文に注目。6 種の時制・相・モダリティ表現を参照し、6 種の言語機能（下位の 132 種の発話行為を含む）、特に間接発話行為を同定していった。その後、時制・相・モダリティ表現を指定した構文と間接発話行為との関係をコロストラクション分析を通して統計的に確認した。

① 状態スキーマ構文（現在）は、タイプ１（事実報告・要求：同定する）(e.g., *I am a psychologist*)、タイプ１（事実報告・要求：尋ねる）(e.g., *Are you sure*?)、タイプ２（態度表現・認知：不満を示す）(e.g., *the other two are bit thick*) の間接発話行為と関連性が強く、特に方向性の結果から、構文から見て主に３つの間接発話行為が出現しやすいことが明らかとなった。② 状態スキーマ構文（過去）は、タイプ１（事実報告・要求：報告する）(e.g., *It was really complicated yeah*) の間接発話行為と関連性が強く、特に方向性の結果から見ても、構文から主にこの間接発

話行為が出現しやすいことがわかった。③ 場所スキーマ構文（現在）は、タイプ１（事実報告・要求：報告する）(e.g., *I am here*)、タイプ１（事実報告・要求：訂正する）(e.g., *he's not here*)、タイプ１（事実報告・要求：尋ねる）(e.g., *Is it on top*?) の間接発話行為と関連性が強く、特に方向性の結果から、構文から見て主に３つの間接発話行為が出現しやすいことが明らかとなった。④ 場所スキーマ構文（過去）は、タイプ１（事実報告・要求：報告する）(e.g., *so presumably that was on camera*) の間接発話行為と関連性が強く、特に方向性の結果から見ても、構文から主にこの間接発話行為が出現しやすいことが明らかとなった。⑤ 所有スキーマ構文（過去）は、タイプ１（事実報告・要求：報告する）(e.g., *She always had loads of photos yeah*)、タイプ２（態度表現・認知：蓋然性を示す）(e.g., *If I had tissue paper printed with Honest on year then*)、タイプ１（事実報告・要求：尋ねる）(e.g., *but you know I had a bad stomach*?) の間接発話行為と関連性が強く、特に方向性の結果から、構文から見て主に３つの間接発話行為が出現しやすいことが明らかとなった。⑥ 所有スキーマ構文（完了形）は、タイプ１（事実報告・要求：訂正する）(e.g., *I haven't had mine two*) 、タイプ１（事実報告・要求：報告する）(e.g., *I've had a headache since Monday*) の間接発話行為と関連性が強く、特に方向性の結果から見ても、構文から主にこの間接発話行為が出現しやすいことが明らかとなった。

(2) 心理スキーマ構文の場合

13 種の中でも中頻度の心理系３種の典型的な構文、感情スキーマ（emotion schema）構文、知覚・認知スキーマ（perception & cognition schema）構文、心理スキーマ（mental schema）構文に注目、６種の時制・相・モダリティ表現を参照し、６種の言語機能（下位の 132 種の発話行為を含む）、特に間接発話行為を同定していった。その後、時制・相・モダリティ表現を指定した構文と間接発話行為との関係をコロストラクション分析を通して統計的に確認した。

① 感情スキーマ構文（現在）は、タイプ１（事実報告・要求：報告する）(e.g., *I like the colour of them*)、タイプ１（事実報告・要求：訂正する）(e.g., *no I don't like that idea at all*) の間接発話行為と関連性が強く、特に方向性の結果から、構文から見て主に２つの間接発話行為が出現しやすいことが明らかとなった。② 感情スキーマ構文（モダリティ）は、タイプ１（事実報告・要求：尋ねる）(e.g., *Would you like some cheese from the fridge for it*?)、タイプ２（態度表現・認知：願望・欲求を示す）(e.g., *I'd like to climb Ben Nevis yeah*)、タイプ２（態度表現・認知：蓋然性を示す）(e.g., *but you might like him more*) の間接発話行為と関連性が強く、特に方向性の結果から見ても、構文から主に３つの間接発話行為が出現しやすいことが明らかとなった。③ 知覚・認知スキーマ構文（現在）は、タイプ１（事実報告・要求：報告する）(e.g., *I just see the flowers*)の間接発話行為と関連性が強く、特に方向性の結果から、構文から見て主に１つの間接発話行為が出現しやすいことが明らかとなった。④ 知覚・認知スキーマ構文（過去）は、タイプ１（事実報告・要求：報告する）(e.g., *we saw a jaguar footprint*)、知覚・認知スキーマ構文（完了）も、タイプ１（事実報告・要求：報告する）(e.g., *I've seen this*)とそれぞれ関連性が強く、特に方向性の結果から、構文から見て主に１つの間接発話行為が出現しやすいことが明らかとなった。⑤ 知覚・認知スキーマ構文（モダリティ）は、タイプ２（能力）(e.g., *You can see it right on the TV*)とタイプ２（態度表現・認知：蓋然性を示す）(e.g., *I might see you later*)、とそれぞれ関連性が強く、特に方向性の結果から、構文から見て主に２つの間接発話行為が出現しやすいことが明らかとなった。⑥ 心理スキーマ構文（現在）は、タイプ２（態度表現・認知：確信を示す）(e.g., *I think that's probably about two foot high*)の間接発話行為、タイプ１（事実報告・要求：訂正する） (e.g., *I don't think it will hard for me to pack*) の間接発話行為、そして、タイプ１（事実報告・要求：尋ねる）(e.g., *Do you think I can turn the oven off now*?)の間接発話行為と関連性が強く、特に方向性の結果から、構文から見て主に３つの間接発話行為が出現しやすいことが明らかとなった。⑦ 心理スキーマ構文（過去）は、タイプ２（態度表現・認知：確信を示す）(e.g., *I just thought you're actually not that cool*) と関連性が強く、特に方向性の結果から、構文から見てこの間接発話行為が出現しやすいことがわかった。

(3) 力学的・動的スキーマ構文の場合

話し言葉のやり取りではよく使われる力学的・動的スキーマ構文の中でも４種の比較的頻度の高い典型的な構文、行為スキーマ（action schema）構文、主体移動スキーマ（self-motion schema）構文、使役移動スキーマ（caused-motion schema）構文、授与スキーマ（transfer schema）構文に注目し、６種の時制・相・モダリティ表現を参照し６種の言語機能（下位の 132 種の発話行為を含む）、特に間接発話行為を同定していった。その後、時制・相・モダリティ表現を指定した構文と間接発話行為との関係をコロストラクション分析を通して統計的に確認した。

① 行為スキーマ構文（現在）は、タイプ１（事実報告・要求：訂正する）(e.g., *It doesn't make much difference today*?) の間接発話行為、タイプ１（事実報告・要求：報告する）(e.g., *He makes quite a mess*) の間接発話行為と関連性が強く、特に方向性の結果から、構文から見て主に２つの間接発話行為が出現しやすいことが明らかとなった。また、② 行為スキーマ構文（過去）は、タイプ１（事実報告・要求：報告する）(e.g., *I made cheddar cheese soup the other day*)、③ 行為スキーマ構文（進行）は、タイプ１（事実報告・要求：報告する）(e.g., *You are making excuses*)、④ 行為スキーマ構文（モダリティ）は、タイプ２（態度表現・認知：能力を示す）(e.g., *I can make those choices*)とそれぞれ関連性が強く、特に方向性の結果から、構文から見

て主にそれぞれ１つずつの間接発話行為が出現しやすいことが明らかとなった。⑤ 主体移動スキーマ構文（現在）は、タイプ１（事実報告・要求：報告する）(e.g., *I go to class in the morning*)の間接発話行為とタイプ２（態度表現・認知：蓋然性を示す）(e.g., *if you go there*) の間接発話行為と関連性が強く、特に方向性の結果から、構文から見て主に２つの間接発話行為が出現しやすいことが明らかとなった。また、⑥ 主体移動スキーマ構文（過去）は、タイプ１（事実報告・要求：報告する）(e.g., *I went to Tesco's specifically to buy these things*)、⑦ 行為スキーマ構文（進行）は、タイプ２（態度表現・認知：意図を示す）(e.g., *I'm gonna now bye for ever*)、⑧ 行為スキーマ構文（モダリティ）は、タイプ２（態度表現・認知：蓋然性を示す）(e.g., *I might go to Poland*) とそれぞれ関連性が強く、特に方向性の結果から、構文から見て主にそれぞれ１つずつの間接発話行為が出現しやすいことがわかった。⑨ 使役移動スキーマ構文（現在）は、タイプ２（態度表現・認知：意図を示す）(e.g., *when you put a camera in front of them*)の間接発話行為とタイプ１（事実報告・要求：報告する）(e.g., *They put them in the freezer*) の間接発話行為と関連性が強く、特に方向性の結果から、構文から見て主に２つの間接発話行為が出現しやすいことが明らかとなった。また、⑩ 使役移動スキーマ構文（過去）は、タイプ１（事実報告・要求：報告する）(e.g., *She put some photos on Facebook*) と関連性が強く、⑪ 行為スキーマ構文（モダリティ）は、タイプ２（態度表現・認知：蓋然性を示す）(e.g., *You might put it on your Amazon wish list*) とタイプ２（態度表現・認知：意図を示す）(e.g., *I'll put the bookmark in that page*) の間接発話行為と関連性が強く、特に方向性の結果から構文から見て、それぞれ特有の間接発話行為が出現しやすいことが明らかとなった。⑫ 授与スキーマ構文（現在）は、タイプ１（事実報告・要求：報告する）(e.g., *They give it to you*)の間接発話行為と、(m) 授与スキーマ構文（過去）は、タイプ１（事実報告・要求：報告する）(e.g., *He gave his ticket to someone else*) の間接発話行為と、⑬ 授与スキーマ構文（完了）は、タイプ１（事実報告・要求：報告する）(e.g., *She's given complete control over to you*) の間接発話行為とそれぞれ関連性が強く、特に方向性の結果から、構文から見てそれぞれ主に１つずつの間接発話行為が出現しやすいことが明らかとなった。⑭ 授与スキーマ構文（モダリティ）は、タイプ２（態度表現・認知：能力を示す）(e.g., *I can give it to you okay*) とタイプ２（態度表現・認知：蓋然性を示す）(e.g., *He could give them to them next time*)と関連性が強く、特に方向性の結果から、構文から見て主に２つの間接発話行為が出現しやすいことが明らかとなった。

(4) 教育的示唆

典型的な構文は、文脈が与えられると多義的で表出される間接発話行為の力強さも文脈によりさまざまと言える。本研究では、(1) 教育的な視点から各構文に見られる間接発話行為の中でも慣習的な（頻度が高く構文との結びつきも強い）間接発話行為に注目し、その言語特徴を添える形で「典型的な構文の指導リスト」を精緻化した。その上で、(2) 今までの教育文法では、主にモダリティ表現の言語機能に注目し間接発話行為が記述・説明されてきたが、文脈との慣習的な相性もふまえ、頻度の高い時制・相表現の言語機能（特に認知語用論的機能）にも注目し、間接発話行為を記述・説明していく必要性を指摘した。最後に、(3) 教室で文法指導を行う際、典型的な構文の時制・相・モダリティ表現が文脈に応じてある程度固定化される慣習性に注目し、その構文が自然と出てきやすい場面や状況をタスク環境に落とし込み、典型的な構文と間接発話行為双方から、効果的な文法指導法（解釈活動・明示的指導・機械的練習・タスク・協調的対話など）を模索していく必要性を指摘し、本研究を終えた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Yoshiyuki Notohara
２．発表標題 Exploring Illocutionary Force of Tense-Aspect-Modality (TAM) Specified Canonical Constructions: A Collostructional Approach
３．学会等名 The 18th International Pragmatics Conference (IPrA)（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Yoshiyuki Notohara
２．発表標題 Conventionalised Illocutionary Scenarios and Figurative Thought Patterns from the Psychological Schema Constructions in Spoken English
３．学会等名 The 16th International Cognitive Linguistics Conference (ICLC)（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Yoshiyuki Notohara
２．発表標題 Illocutionary Act Potential of the Force-Dynamic Schema Constructions in Spoken English Corpus
３．学会等名 The 56th Annual Conference of British Association for Applied Linguistics (BAAL)（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計3件

１．著者名 池野修、能登原祥之、三野宮春子、Mark Campana、Brian Murray、伊藤奈月、恩庄香織、高木圭、縄稚亜矢子、萩森慶一、数研出版株式会社編集部	４．発行年 2022年
２．出版社 数研出版	５．総ページ数 160
３．書名 『COMET English Communication I』高等学校教科書 英語コミュニケーション Ⅰ	

１．著者名 池野修、能登原祥之、三野宮春子、Mark Campana、Brian Murray、伊藤奈月、恩庄香織、高木圭、縄稚亜矢子、萩森慶一、数研出版株式会社編集部	４．発行年 2023年
２．出版社 数研出版	５．総ページ数 184
３．書名 『COMET English Communication II』高等学校教科書 英語コミュニケーション II	

１．著者名 池野修、能登原祥之、三野宮春子、Mark Campana、Brian Murray、伊藤奈月、恩庄香織、高木圭、縄稚亜矢子、萩森慶一、数研出版株式会社編集部	４．発行年 2024年
２．出版社 数研出版	５．総ページ数 151
３．書名 『COMET English Communication III』高等学校教科書 英語コミュニケーション III	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関